
焰の使徒

蒼山れい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

焰の使徒

【Nコード】

N1791H

【作者名】

蒼山れい

【あらすじ】

いつ果てるとも知れぬ冬に閉ざされたラシェン王国。白い大地には白魔と呼ばれる人外の化生がはびこり、民の心は絶望に凍りついていった。だが希望の灯は絶えることなく、焰の意志となって燃え上がる。〈呪われしもの〉と蔑まれる異形でありながら、人々のために戦い続ける彼らの名は――〈焰の使徒〉。

焰の誓い

忠誠を、と彼女は言った。

揺らめく灯火を受けて、波打つ豊かな髪が黄金色に輝いていた。

「生涯の忠誠を誓えますか。その命をわたくしに捧げると。わたくしが命じれば、どんな惨たらしい死さえ甘受できると」

見つめてくる空色の瞳は、決意と迷いの狭間で揺れていた。微笑めばどんなに美しいだろう。だがその白い面には、悲愴な影が色濃く落ちていた。

心優しい方なのだろう。こんな醜い、呪われた異形の命さえ惜しんでくださるような。きっと野に咲く小さな花を踏むことさえためらわれるに違いない。

私は微笑んだ。鉄格子の向こうから戸惑うような気配が伝わってきた。

「姫君、あなたのお名前を教えてくださいませんか」

久しぶりに聞く己の声は、あいかわらず錆びた金属がこすれるような、耳障りなものだった。だが彼女は顔をしかめるどころか、大きく目を睜った。

「契約に応えるというのですか？」

私の声ではなく、私の返答に驚いている。それが嬉しくて、私になるだけ声を軋ませないように心がけて答えた。

「従えと命じるのではなく従えるかと問うてくださった方は、あなたがはじめてです」

この地下牢につながれ、闇に閉ざされてから、どれほどの歳月が流れたのだろうか。気が遠くなるような時のなか、幾人もの王が契約を求めてきたが――そのだれもが、私の意志など無視し、一方的に服従を突きつけてきた。忌まわしい異形に心などありはしないとも言おうように。

「あなたはそんなつもりではないのかもしれませんが。けれど私にと

って、それはあなたが『私』という心を認めてくださったことなのです。人と同じように、怒り、泣き、笑う、心を持つ存在なのだと――あなたが、私を認めてくださったのです」

じつと淡い青の双眸を見つめ返すと、彼女は肩を震わせた。泣き出す寸前のように表情を歪め、細い指で鉄格子を握りしめる。

「わたくしは歴代の王と何も変わりません。あなたを従え、白魔どもと戦わせようとしている。あなたの命を、わたくしたちのために犠牲にしようとしている。それなのに……」

応えないで、と彼女は声なき声で叫んでいた。まるで遠い日に別れを告げた太陽の光とあたたかさのようで、私は目を細めた。

「応えましょう、姫君。たとえば死が待ち受けていようとも、喜んであなたの指し示す道を進みましょう」

私はゆっくりと鉄格子に近づいた。四肢にまとわりつく鎖がじゅらじゅらと煩わしい音を立てた。

「ためらいますな、姫君。あなたが望むなら、それを叶えることこそ私の幸福なのです」

「……愚かな」

彼女はため息をつくように、深い悲嘆をこめて呟いた。そして静かに手を伸ばした。

微かな衣擦れの音がした。そう思った瞬間、たっぷりとした絹の袖が鉄格子の隙間から現れ、やわらかな掌がそっと頬に触れた。

私は息を吞んだ。

しなやかな指先が輪郭をたどるように私の頬を撫でる。彼女はきゅゅと眉間に皺を寄せ、睨むように瞳を据えた。

「なんて愚か。あなたほどの愚者を、わたくしは見たことがありません」

それは糾弾であって糾弾でなかった。

私が声を詰まらせていると、彼女は頬から手を離し、手の甲を上にして目前に突きつけた。

「わたくしの名はネディエ。ネディエ・ローダンティス・ラシエン。

現王ファナールが娘、ラシエンの王座を継ぐ者。“焰纏う獣”よ、わたくしと契約を結び、わたくしの僕となりなさい」

命じる声は凜と、透きとおるように響いた。

——ああ。

体の奥底で、魂ともいうべきものが激しい歓喜に打ち震える。長い間虚ろだった胸の内が、燃えるように熱い何かに満たされていく。溢れそうになる涙を堪えながら、私は恭しく彼女の——ネディエ様の手を取ると、その処女雪のような手の甲に忠誠の口づけを落とした。

「私の名は、カルヴァニール。“焰纏う獣”カルヴァニール。ラシエンの世継ぎの姫、あなたの望むままに契約を結び、生涯の忠誠を誓いましょう。この命尽きるまで、私はあなたのものです」

我が君。

呼びかけとともにまなざしを返すと、ネディエ様は微笑んだ。それはどこか翳りを帯びた悲しげなものだったけれど——とても、とても美しかった。

焰の誓い（後書き）

『手に関する10のお題』より『2. 手の甲に口づける』。

01 白い闇のなかで

風が唸っていた。

視界は真っ白に塗り潰され、容赦なく叩きつけられる雪の礫に、声を出すどころか息さえできない。前へ進むことも顔を上げていることもできず、おれは地面にうずくまっていた。

もう寒いと感じることさえ忘れていた。

胸が苦しい。

空気を吸いこむたびに、喉の奥が灼けるように痛んだ。冷たさが度を超えると、逆に熱さを覚えるんだ。圧迫感と火傷したような疼きに、おれは声にならない呻きを上げた。

ああ、風の唸り声が遠くなっていく。白い闇がだんだんと狭まって黒くなっていく。

このまま死ぬのか？

ここは北の辺境区の更に最北、白魔^{はくま}がうろつく危険区域だ。凍死する前に、においを嗅ぎつけてやってきた白魔に骨の髄までしゃぶり尽くされるだろう。あの、心臓まで冷えきった氷の魔物たちにとって、熱い生きものの血肉は何よりのご馳走だ。

ちくしょう。

こんなところで、こんな惨めな死に方をしなくちゃいけないのか。異形に生まれたっていうだけで、あんな連中のために。

ふざけるな！

死にたくない、死にたくない、死にたくない！

これがおれのさだめだっていうのか。こんな結末が、おれの終焉だっていうのか。

どうして。

どうして、おれが死ななくちゃいけないんだ。異形というだけで。おれが、望んでこんな風に生まれてきたわけじゃないのに。くそつたれ。

何もかも、すべてが最低だ。最悪だ。おれをへ呪われしものゝと蔑むやつらこそ、どろどろに醜い存在だというのに。あんなやつらのために、おれが白魔の餌にならずにちゃいけないなんて。

薄れていく意識のなか、おれはひたすら、この世のありとあらゆるものを罵っていた。ほとんど感覚を失い、罵倒に夢中になっていたせいで、近づいてくる気配に気づかなかった。

「……生きているか？」

遙か遠くから、ひどく不快な、錆びた金属が軋むような声が聞こえた。

——炎？

閉ざされかけた視界に一瞬、鮮やかな赤が浮かび上がった。

まるで燃え盛る炎のような、灼熱の色。

だれかがそばにしていると理解した途端、おれの意識は泡沫うたかたのように弾けた。

喜べ、と村長は言った。

——おまえにしかできぬことだ。おまえは異形でありながら、この村の役に立ってるのだ

白魔が村を襲ったのは、三日前のことだった。

突然の吹雪とともに現れた白魔は、あつという間に村人の三分の一近くを食い殺した。荒れ狂う雪と風が視覚と聴覚を奪い、どこから襲ってくるかわからない白魔から、おれたちは逃げ惑うしかかった。白い嵐が去ったあとには、目を背けたくなるような血の海が広がっていた。

白魔がまたやってくることはわかっていた。一度に村人を狩り尽くさないのは、獲物を恐怖でじわじわと追い詰めるためだ。白魔のなかには、そうやって獲物をいたぶることを好むやつがいる。

すぐに領主の館へ早馬が走ったけれど、間に合わないことはだれ

もがわかっていた。村から領主の館まで、一日中休まずに馬で駆けても十日はかかる。討伐士隊が来る頃には、村人は全員骨になっているだろう。

生き残った村人たちは話し合い——そして、結論を下した。

——討伐士隊が来るまでの足止めでかまわん。どうにか白魔を食い止める。異形のおまえならば、できるはずだ

笑いたくなるくらい、単純な発想だった。

いつ戻ってくるかわからない白魔への恐怖に、ついに頭がおかしくなってしまったに違いない。異形というだけで、討伐士でもない、剣さえ持ったことのないおれが、あのおそろしい魔物どもと戦えるなんて。

そんなことできないっていくら叫んでも、だれも聞いてくれなかった。

ほとんど引きずられるようにして村の外に放り出された。食糧も、短剣一本さえ与えられずに。

固く閉ざされた門は、どんなに叩いても開かなかった。門の向こうから返ってきたのは、怒声と石礫だった。

それは追放だった。

一度村を出れば、二度と帰ることは許されない。わかっていたはずだ。村のやつらに——血のつながった家族にすら、決して受け入れてもらえないって。

皮膚が裂けて血の滲んだ拳を門に打ちつけながら覚えた感情は、なんて呼ぶべきだったんだろう。

憎悪か、嘆きか。それとも絶望か。

いや、そのすべてだったのかもしれない。

おれはひとり、雪原をさまよった。凍てつく風が吹き渡る白い世界。何もない、虚無だけが重く横たわっていた。

やがて襲いかかってきた雪嵐のなか、おれがわかったことはただひとつ。

どうしようもないくらい、自分が孤独だっていうことだけだった。

02 貴婦人と獣と

だれかの話し声が聞こえる。

おれは薄く目を開いた。ぼんやりと滲んだ視界に光が溢れてまぶしい。

やわらかくてあたたかいものに包まれている。何度か瞬きをくり返し、見たことのない天井が目映ってから、ようやく自分が布団の中にいることに気がついた。

「――ああ、目を覚ましたようですわね」

優しい女の声落ちてきた。影が差して、顔を覗きこまれる。

「気分はいかが？」

現れたのは、頭からすっぽりと黒い紗うすぎぬのベールを被った女の顔だった。目も鼻もベールに隠れてしまっている。わずかに覗く、赤い唇がひどく鮮やかだった。

「……………だ」

だれだと尋ねようとしたけれど、うまく声が出せなかった。彼女は薔薇の蕾に似た唇で、完璧な微笑を形作った。

唇の端を持ち上げる、そのちょっとした動作におれは息を呑んだ。「わたくしはジルエッタと申します。ここはミルドーの町にある、

〈北の果ての砦〉ですわ」

「ミル、ドー……」

記憶にある地名だった。確か、村より更に北にある、白魔との戦いの前線基地だ。

ゆっくり体を起こすと、思ったとおりふかふかの布団を敷き詰めた寝台の上だった。ジルエッタは、寝台の傍らに置かれた丸椅子に座っていた。

彼女は襟の詰まった漆黒のドレスを纏っていた。襟や裳裾、袖口に繊細なレースの縁取りがついている。ベールと合わせて、まるでこれから葬式にでも出るような装いだ。

「……おれ、なんでここに？」

戸惑いながら尋ねると、ジルエッタの後ろから別の声が返ってきた。

「雪原で倒れていたところを、私と部下が見つけたのだ」

聞き覚えのある、錆びた金属がこすれるような、耳障りな声。

思わず顔をしかめたおれの目に飛びこんできたのは、触れるだけで火傷しそうな赤だった。今まさに激しく燃え上がろうとする炎の色。

「……ッ」

おれは迸りそうになった悲鳴を、とっさに呑みこんだ。

そこにいたのは——獣だった。

いや、人と獣が混ざり合ったような姿って言ったほうが正しいかもしれない。体つきは人間の男のそれで、背が高く、無駄な肉を削ぎ落としたように引き締まっている。

顔は狼そっくりだけれど、豊かな鬣たてがみは獅子に似ていた。唯一身に付けているズボンの影に見え隠れする尾は、馬のように長い。

全身を覆う真っ赤な体毛。雪嵐のなかで意識を失う寸前、たった一瞬だったにも関わらずはつきりと瞳に焼きついた、あの赤だ。

おれは左胸を押さえた。心臓が壊れたように暴れている。

自分以外の異形を見るのは、これがはじめてなわけじゃない。でも、こんなにも人離れた姿は見たことがない。

ふっと獣が目を細める。鋭い琥珀色の双眸に見つめられ、震えが走った。

「私がおそろしいか」

大きく裂けた口から、ちらりと白い牙が覗いた。

笑った、のだろうか。

獣面から表情を読み取るのは難しい。だけど、なぜかさびしそうに——悲しそうに見えた。

……ああ、そうだ。

これは、あきらめてしまったやつの表情だ。おそれられることを

受け入れてしまった顔だ。

おれは左胸に当てた手をぎゅっと握りしめた。鼓動が元どおりになつていくのを感じながら、獣の目を睨みつける。

悔しかった。

あきらめたあいつの表情が、まるで村人たちの言い分を認めているようで。彼らの言葉こそ正しい、だから受け入れろと言っているようで――泣きたくなるくらい悔しかった。

「……なんで」

村人たちの罵倒や嘲笑が甦る。母親の、悲鳴じみた叫び声が。

――化けもの！

うるさい。うるさい、うるさい。

「なんでそんな風に笑うんだよ……っ」

黄金色を帯びた目が丸くなる。獣は緩慢に瞬きをくり返した。

おれは唇を噛みしめた。滲んだ涙を見られたくなくて、深く俯く。そっと肩に触れる手があった。促されるように顔を上げると、ほっそりした指先が優しく目元を拭った。

息を呑んだおれに、ジルエツタは唇だけで甘く微笑みながら尋ねてくる。

「訊いてもよろしくて？」

「な、何を？」

「いろいろなことを。そうですね……まずは、あなたのお名前を」
思わず拳を握り締めた。

ジルエツタを見る。そして彼女の肩越しに、腕を組んだまま何も言わない獣を。

答えを待つふたりの沈黙が痛い。

「……………ない」

「え？」

「おれ、名前、ない」

注がれるまなざしに耐えられなくて、おれはまた顔を伏せた。

「いつも『異形』とか『忌み子』とか、そういう風に呼ばれてたか

ら」

あの村におれの居場所なんてなかった。だから必要とされていなかった。笑いかけられるんじゃなくて罵られてきた。抱きしめられるんじゃなくて暴力を振るわれてきた。

——何もかもあんたのせいよ！ あんたさえ生まれなければ、あたしはこんな目に遭わなくてよかったのに！

異形を産んだ女と後ろ指を指差されるたび、母親はおれを詰った。おれが生まれたせいで父親から縁を切られ、実家からも追い出されて村人たちに冷たい目で見られるんだと言って。

その母親も、白魔が村を襲った日に死んだ。生きながら食われる絶叫が鼓膜にこびりついている。

「なぜ雪原にいた？」

キィキィと軋む声が問うてきた。視線を上げると、じっと見つめてくる獣と目が合った。

「……住んでた村が、白魔に襲われたんだ。領の隅っこにある村だから、また白魔が戻ってくる前までに討伐士隊が来るのは無理だろうって。そうしたら……討伐士隊が来るまで、足止めしろって言われた」

おれは一度沈黙した。口の中いっぱい苦味を感じながら、残りの言葉を押し出す。

「異形なら……できるだろうって」

それだけが、村人たちにとっておれの価値だったんだ。

「——そうか」

獣は低く、ぞっとするほど静かに呟いた。満月のような双眸が鋭い光を放つ。

だけどそれはほんの一瞬で、おれがハッとしたときには名残もなく消えていた。

「わかった。おぬしの身柄は私が預かるう。この砦には、我らの同胞や理解者が数多くいる。安心して養生するがいい」

くいつと口の端を吊り上げて、驚くほどはつきりと笑ってみせる。

おれはぽかんと目を丸めた。

「では、ジル。あとのことは頼んだぞ」

「お任せくださいませ」

艶やかに笑んだジルエツタに頷いて踵かかひすを返そうとする獣に、慌てて問いかけた。

「なあ、あんたはいつたいだれなんだ!？」

獣は立ち止まると、肩越しに振り返った。

「私はカルヴァニール。女王陛下の名の下に、白魔もとどもを狩るへ焰の使徒」の長だ」

おれは目を瞠った。

聞いたことがある。女王陛下直属の、王国最強の討伐士団。名だたる強者たちを束ねるのは、百数十年もの間、リマールユの永久牢獄に幽閉されていた異形の討伐士――。

「……“焰纏う獣”」

「いかにも」

おどけたようにカルヴァニールは尾を振ってみせた。その様はふたつ名にふさわしく、まるで炎が揺らめいているようだった。

03 新しき日々

「なあ坊主。おまえってば、なんでそんなに器用なんだよ？」

ローアンのため息混じりの問いに、おれは馬鈴薯じゃがいもの皮を剥く手を止めた。

馬鈴薯が詰まった籠越しにローアンの手元を見ると、数分前までそれなりに太っていたはずの馬鈴薯が無惨に痩せこけていた。床の上に胡座をかいた彼の膝の上には、たつぷりと肉のついた皮が散らばっている。

おれは呆れて答えた。

「ローアンが不器用すぎるんだよ。あーあ、そんなに肉ごと剥いちやって。もったいない」

「うっせえ！ 俺だってなあ、普通に剥こうとしたんだよ！」

「わざとやったら、相当悪質な嫌がらせだよな。たぶん料理長に殺されると思うよ」

このラシェン王国は大地の精霊アヴァスの加護を受けているおかげで、他国よりも遥かに実りが多い。白魔がやってくる前は、大陸一の農業国だったそうだ。国中が冬に閉ざされている今、おれたちがどうにか食いつなげていられるのはアヴァスの守護のおかげなのかもしれない。

それでも、野菜ひとつだって無駄にはできない状況だ。おれは剥きかけの馬鈴薯を置くと、空いた片手をローアンに差し出した。

「貸して」

「何を」

「あんたの膝の上に落ちてる肉つきの皮。皮だけ剥くから」

ローアンはあからさまに「納得が行かない」っていう表情を浮かべたけれど、渋々膝の上の破片を集め出した。

床に座りこんで背中を丸めていても、ローアンはやっぱり大きかった。カルヴァニールよりも身長があり、全身を頑丈な筋肉がよろ

っている。白っぽい皮膚はつるりとしていて毛が生えていない。代わりに、黒みがかった緑色の鱗がところどころを覆っている。鼻筋の通った厳めしい顔立ちのなかで、愛嬌のある大きな目が印象的だった。

ローアンは〈焰の使徒〉に所属する異形の討伐士で、おれの世話役的な存在だ。カルヴァニールからの上司命令もあるんだろうけれど、もともとそういう性分なのか何かと面倒を見てくれる。最初の頃は、その屈託のない優しさにどう応えればいいのかわからなかったけれど、今は素直に受け止められている――と思う。

あれから、半月近くが経った。

すっかり回復したおれは、砦の小間使いとして働いている。厨房で野菜の皮剥きをしたり、洗濯女のおばさんたちと一緒に泡まみれになったり、ようは人手の足りない仕事を手伝う雑用係だ。

だれかに命じられたわけじゃなくて、おれから進んでやりはじめたんだ。体が元どおりになってから何もすることがなくて、暇でしやうがなかったから。

村にいた頃は、一日中働きっぱなしが当たり前だった。疲れてへとへto になっても休むことは許されなかった。

だからこの砦に来て最初のうちは、なんの労働も強いられないことに心底驚いた。ぼんやりしていても怒鳴られないし、食事を抜かれない。だれもおれの好きなように過ごさせてくれる。おれは生まれてはじめて『自由』というものを実感した。

だけど、みんなが忙しそうに働いているのにおれだけ何もしないでいるのは、なんだか居心地が悪かった。なんの仕事もしないおれが、みんなと同じようにあたたかい食事や寝床を貰えることが申し訳なかった。

それをローアンに言ったら、「おまえって真面目なやつだなあ」って呆れられた。でも、すぐにカルヴァニールに頼んで雑用係にしてくれた。自分の仕事がないときには、おれの手伝いをしてくれる。……まあ、今のようには手伝ってくれているんだか邪魔しているんだ

か微妙なときもあるけれど。

「ふたりとも、どうだ。皮剥き、終わったか？」

手元に影が差したと思ったら、料理人のひとりがゆっと覗きこんできた。おれはちょうど剥き終わった馬鈴薯を籠に戻しながら、彼を仰いだ。

「うん。あと他にも手伝うこと、ある？」

「いんや、特にないな。……へえ、巧いじゃないか。きれいに剥けてる……って、こっちはほとんど肉が残ってないし」

籠の中から剥いた馬鈴薯を両手にひとつずつ取った料理人は、まるで大きさの違うふたつを比べて目を丸くした。

「そっちがおれで、もう片方はローアンが剥いたんだ」

「うわあ……おいおい、ローアン。おまえ不器用だからって、ここまでいくと極端すぎるぞ」

「放っとけ！」

ローアンは決まり悪そうにそっぽを向いた。料理人は笑いを堪えるように、目を細めた。

「まあ、そう拗ねるなって。ふたりともご苦労さん。今日の晩飯は〈北の果ての砦〉特製シチューだからな。楽しみにしておけ」

「うん、わかった」

おれも笑い返して、ローアンと一緒に立ち上がる。すっかり顔なじみになった料理人たちに挨拶をして、厨房をあとにした。

「このあとは、特になんにも仕事はないから……勉強だよな」

おれは雑用の合間を縫って、ローアンから読み書きを教えてもらっていた。歩きながら隣を見上げると、ローアンは困ったような顔で頭を掻いた。

「あー、悪い。俺、これから仕事なんだよ」

「そっか……」

「あっ、だけど代役頼んどいたから心配ねえぞ！」

代役？

おれが目を瞬かせると、ローアンはにっかと笑って頷いた。

「カルヴァニール団長だ。あの人は頭がいいから、しっかり教えてもらえよ」

04 いちばん大切なこと

静かだ。

少し埃っぽい書庫の中は、いつもとは違った静寂に満ちていた。聞こえるのは、おれの動かす白墨チョークの先が石盤を引っ掻く音だけ。

砦にあるたくさんの部屋のなかで、この書庫は一、二位を争うくらい広い。だけど、天井まである大きな書架がいくつも並び、そこにぎゅうぎゅうと書物が押しこめられているせいか、あまり開放的な空間じゃなかった。はじめて足を踏み入れたときは、めまいが起こりそうな量の書物に取り囲まれて窒息するかと思っただけくらいだ。そんな息苦しい場所だからか、書庫はほとんど無人状態だった。今も、おれとカルヴァニール以外にはだれもない。

ふたりきり、という状況はいつものことだ。ただ、今日は相手が違う。ローアンの場合はおしゃべりもあつたし、沈黙してもどこか空気はゆるやかだった。でもカルヴァニールは指示を出したきり黙りこみ、ひと言も声を洩らしちゃいけないような緊張感があたりを包んでいた。

指が痛い。

手渡された紙に書かれた山ほどの単語を一個につき三十回ずつ、ひたすら書き写す。おかげでよく覚えられたけれど、手の感覚がおかしくなりそうだ。

少しくらいなら休んでもいいだろうか。

おれは白墨を石盤の上に置くと、ちらりと向かい側の席に座ったカルヴァニールを盗み見た。

彼は何百頁ページもありそうな、分厚い本を読んでいた。鋭く尖った爪の生えた指で頁をめくれるのだろうか。

書庫の中は薄暗い。窓から射す陽射しを立ち並ぶ書架が遮ってしまふからだ。手元を照らすために、わざわざ灯りを持ちこまなくちゃならない。

ぼんやりした洋灯ランプの光を受けて、カルヴァニールの毛並みがいつそう赤く輝いていた。よく見ると根本のほうで濃い色をしていて、毛先に近づくにつれてだんだん淡くなっている。

「――どうした」

ハッと我に返ると、黄色がかった目と視線が合った。反射的に息を呑んでしまう。

「いや、その、指が痛くなって……」

しどろもどろに言い訳すると、ああ、とカルヴァニールは声を洩らした。

「そうだな。そろそろ休憩を取るか」

本を閉じる音に、おれはほっと息をついた。

「疲れたか？」

カルヴァニールが苦笑したような口調で訊いてくる。素直に答えていいのか迷ったけれど、結局頷いた。

「どうだ、ここでの暮らしは。何か不都合はないか」

今度はぶんぶんと首を横に振る番だった。

「全然。飯が食べられるし、あったかい布団で眠れるし、みんな優しいし。村にいた頃とは大違いだ」

本当に、何もかも。もしかしたらこれは夢で、おれはまだ冷たい雪のなかで眠っているんじゃないかって何度も思った。

「そうか」

鋭い獣の目がほんの少しやわらかくなる。

〈炎の使徒〉のなかで一番厳しくて、一番優しい人――ローアンはカルヴァニールのことをそんな風に評していた。堅物で厳格な性格ばかり目立つけれど、本当はだれよりも情が深いんだって。

今なら、それがわかるような気がした。

――『父さん』ってこんな感じなんだろうか。

実の父親のことは何も知らない。顔を見たこともないし、声を聞いたこともない。おれが生まれたその日に母親とおれを家から追い出すような男だから、ろくでもないようなやつには違いない。

だけど、もしもおれが普通の人間だったら――父親は、こんな風に笑いかけてくれたんだろうか。愛して、くれたんだろうか。

「……あの、さ」

包みこむような空気に、おれはためらいがちに口を開いた。

ずっと訊きたいことがあった。今更といえど今更なんだけれど。

「なんだ？」

「おれ――ここにいても、いいのかな」

カルヴァニールは鼻の頭に皺を寄せた。

「……なぜそう思う」

「だって、おれなんか養ったってなんの役にも立たないじゃないか。ガキだし、あんたやローアンみたいに戦えるわけじゃないし」

「仕事を手伝ってくれて助かると、皆言っていたぞ」

「小間使いなんてだれだってできるよ」

そう。おれがやっていることは、だれにでもできることだ。おれがこの砦に必要とされる理由なんてひとつもない。

だから不思議でしやうがなかった。

「なあ、カルヴァニール。なんでみんな優しくしてくれるんだ？」

出てけって言わないんだ？」

カルヴァニールは沈黙し、やがて鼻の頭の皺を消すと、ため息をつくような声で答えた。

「……それが、この砦の者たちにとって、当たり前のことだからだろうな」

琥珀色の目が、どこか遠くを見つめるように細くなる。

「この砦にいる者たち、そして我ら〈焔の使徒〉の多くが、おぬしと同じように帰る家を失ったのだ。〈冬〉のもたらした飢餓や貧困のために口減らしに捨てられた者、白魔に家族を奪われた者、〈呪われしもの〉と迫害を受けた者……行き場のない彼らを受け入れたのが、この〈北の果ての砦〉と〈焔の使徒〉――いつ果てるともわからぬ、常に死が背に佇む戦場だ」

死。冷たいその響きに、おれは思わず息を呑んだ。

「彼らはおぬしの痛みを知っている。だからこそ、おぬしを受け入れたのだ。同じ傷を持つ彼ら自身がそう望んでいたから」

だが、とカルヴァニールは続けた。

「もしもここにすることがおそろしければ、出ていってもかまわん。それはおぬしの自由だ」

「……止めないの？」

心のどこかで引き止めてほしいと思う自分がいた。

そんなおれの胸の内を見透かすように、“焰纏う獣”は小さく笑った。

「あれやこれや言ったところで、それは我らの意思をに過ぎん。何よりも大切なのは、おぬし自身の意思だ」

「おれの、意思……」

くり返すように呟いたおれに、彼は頷いた。

「焦る必要はない。満足の行く答えが出たら聞かせてくれ」

「……わかった」

おれはこくりと頷き返した。

「それともうひとつ」

「え？」

「おぬしは、雑用係などだれにもできることだと言った。確かにそうかもしれん。だが大切なのは、おぬしが皆の役に立ったということだ」

カルヴァニールの口調は静かで、けれど腹の底に響くような力強さがあった。

「重んずるべきは、特別な力があるか否かではない。その者が何をしたかということだ。おぬしはおぬしにできることを、精いっぱいやっている。その誠実さにこそおぬしの真価があると、私は思う」

一度言葉を切ると、カルヴァニールはふつと微笑んだ。

「おぬしは私に、『自分はここにもいいか』と訊いたな。私は、おぬしは充分それに足る者だと思っている」

おれは唇を動かした。

何か言うべきなのに、喉は震えるばかりで、声が出てこない。

「さて、では再開するか。いつまでも話しては、夕食までに間に合わんからな」

「……………うん」

やっと口にできたのは、それだけだった。

広げた紙に視線を落とすふりをしながら、おれは顔を俯けた。奥歯をぐつと噛みしめる。

そうしていないと、こみ上げてくる情けない嗚咽が今にも溢れてしまいそうだった。

05 いつか太陽になる日まで

空を見上げると、磨いたような円い月が浮か^{まわ}んでいた。

珍しいことに今夜は晴れていた。砂金を撒いたような星々がはつきり見える。松明がいらないくらいの明るさだ。

おれは掌をこすり合わせ、かじかんだ指先に息を吹きかけた。

ここは城壁塔のてっぺん、見張りの兵士がいる場所だ。夜番の兵士が風邪を引いて寝こんでしまい、急遽その代役をする羽目になった。

異形のおれは普通の人間よりも目がいいし、夜目が利く。夜番にはもってこいというわけだ。

砦で一番高い場所からは、ミルドーの町、そして北に広がる雪原を見渡すことができた。

おもちゃのように小さな家々が寄り集まって、細かくて複雑な町並みを作り上げている。町中が眠りに沈み、灯の絶えた様子はさびしげで、眺めていると正体のわからない不安がこみ上げてきた。

死んだように静まり返ったミルドーの向こうには、どこまでもどこまでも平らな白が続いていた。いや、月明かりの下では、仄青い白銀だろうか。薄闇のなか、大地がぼう……と輝いている。幻想的な――底冷えするくらい美しい光景だった。

おれは外套の上から羽織った毛布を胸元に引き寄せた。寒さがひどくなったような気がする。

やっぱり、ローアンにつき合ってもらうべきだっただろうか。外套を借りたときに、「一緒に行ってやろうか？」と言ってくれたんだ。ただし、にやにやと笑いながら。

悪いからと断ったけれど、本音をいえば、来てほしいと頼んだらおれの負けだと思ったんだ。兄貴風を吹かせるローアンに負けることほど悔しいことはない。

耳が痛くなるほどの静寂が急に迫ってきた。意地を張ったことを、

おれは少し後悔しはじめていた。

「どうだ、何か変わったことは――」

「うっ、わぁ!」

突然かけられた声に、文字どおり飛び上がってしまった。

「……別にそこまで驚かなくてもよいだろう」

おそるおそる振り返った先には、呆れ顔のルヴァニールが立っていた。

「驚くよ! いきなり声かけられたら、だれだって驚くってば!」

おれは必死に反論した。なんて心臓に悪いんだ。

「とうかさ、あんた気配なさすぎるよ。頼むから、音もなく後ろに立たないで」

「つい癖でな。今後は気をつけよう」

気配を消すのが癖ってどうなんだろうって思ったけれど、口にはしないでおいた。

「……で、何か用?」

ずいぶん高い位置にある狼の顔をちらりと仰ぐと、ああ、とカルヴァニールは答えた。

「様子見にと、差し入れを届けに」

差し出された茶碗には、見慣れない飲みものがたっぷり入っていた。湯気と一緒に甘いにおいが立ちのぼっている。

「……何これ」

「ココアだ」

おれは茶碗を受け取った。冷えきった手に、じわりと熱が沁みる。

茶碗に顔を近づけると、濃厚なおいが鼻腔をくすぐった。口の中に涎よだれが滲む。

軽く吹いてから、ひと口舐めてみる。舌先に、砂糖よりも甘く、それでいてほろ苦い不思議な味が広がった。

おれは目を瞬かせて、もうひと口飲んだ。

「どうだ?」

「……………おいしい」

そうとしか言い様がない。こんなもの、生まれてはじめてだ。

「そうか」

カルヴァニールは満足そうに目を細めた。

一気に飲むにはもったいなさすぎて、おれはちびちびと時間をかけてカルヴァニールの厚意を飲んだ。

最後のひと口を飲み干すと、思わずため息がこぼれた。

「ごちそうさま。……ありがとう」

「気に入ったのなら何よりだ」

茶碗を受け取りながら、カルヴァニールは薄く笑った。表情を読み取れるようになってから気づいたけれど、彼はよく微笑む。

おれはなんだかこそばゆくて、ごまかすように大きな声を出した。「でも、よかったのか？ それって貴重なものなんだろう」

「一杯くらいどうということはない。飲もうとする者もあまりおらんしな」

確かに、皆の人々——特に討伐士たちは、甘ったるいココアよりも、麦酒や葡萄酒ビール^{ワイン}のほうが好きそうだ。

「そっか。ならいいんだけど、さ」

ふっと沈黙が落ちた。

おれは手すりに寄りかかると、軽く身を乗り出すようにして北の方角を睨んだ。視線は雪原に向けていても、意識は隣のカルヴァニールに集中してしまう。

決して息苦しくはない緊張が続いた。

「……あのさ」

おれは手すりをぐっと掴むと、カルヴァニールに振り向いた。

「なんだ？」

「答え、出たんだ」

カルヴァニールは目を瞬かせた。

「ずいぶん早いな」

「考えてみたら、最初っから決まってた」

おれは苦笑した。胸がどきどきしているのに、頭は妙に冴えてい

た。

「それで、おぬしはどうしたいのだ」

おれはカルヴァニールに向き直った。見つめ返してくる双眸は、音もなく燃える蜜色の炎を思わせた。

「おれ……やっぱり、ここにいたい。もう村に帰れないとか、ここしか居場所がないかもしれないとか関係なく、おれが、ここにいたいって思う」

「……いつ死ぬかもわからぬ、戦場なのだぞ」

「うん、わかってる。確かに怖いよ。でも……」

悩まなくたって結論は出ていた。

「おれは、生きていきたい。できるならここで、ローアンやジルエツタや……あんたや、みんなと一緒に」

カルヴァニールは何も言わない。そのまなざしは推し量れないほど深かったけれど、おれはまっすぐ受け止めた。

「死にたくなかったら強くなればいいんだ。だから、おれに戦い方を教えてくれないか。生きていくために。少しでも長くあんたたちといられるように。——みんなを、失わないように」

生まれてはじめて、だれかを大切だと感じた。守りたいと思った。そのために、おれにできることをしようって決めた。

伝えたいことをすべて言いきって、おれは唇を引き結んだ。

再びの沈黙。

「……………よかろう」

やがて、カルヴァニールは静かに頷いた。

「ホントか!？」

「ああ——ただし」

思わず歓声を上げたおれに、〈焰の使徒〉の長は出会ったときと同じようににやりと笑った。

「私の稽古は読み書き以上に厳しいぞ。覚悟しておけ」

「ど、どんとこいだ!」

拳を握って言い返すと、カルヴァニールは笑みの色を深くした。

「では、これも無駄にはならなかったな」

「え？」

「おぬしに、名をやろうと思ってな」

目玉がこぼれ落ちそうになった。

「おれに……名前を？」

「そうだ。名なしのままでは不便だろう」

おれの――名前。

「名づけ親が私では不足か？」

「そっ、そんなことない！」

ぶんぶん首を横に振ると、カルヴァニールはどこか嬉しそうに笑った。

「では受け取ってくれ。おぬしの名は、『ラエル』だ」

「ラエル……」

確かめるように何度も音を舌の上で転がす。ラエル、ラエル、ラエル。

「どういう意味？」

「神聖語で『太陽』という意味だ」

太陽。今のラシエンで最も縁遠く、渴望されているもの。

「たとえ絶望が闇のようにおぬしの心を包みこもうと、己の強さを忘れるな。これから先、幾度となく深い夜がおぬしを襲うだろう。だが、決して希望をあきらめぬおぬしなら、そのたびに闇の底から這い上がれるはずだ。光はめぐり、太陽は必ず我らの頭上を照らす。闇を打ち破って生まれいずる朝陽のように、その輝きでおぬしの世界を照らせ。おぬしが想う者の光となれ」

冷たく澄んだ空気の中、カルヴァニールの声は厳かに響いた。祈りのようなその言葉を、おれは生涯忘れないだろう。

「――うん」

苦しいくらい、胸がいっぱいだった。

「おれ、がんばるよ。あんたのくれた名前に恥じないような男に、いつか必ずなる。だから、だからそれまで……おれが、だれかを照

らす太陽になるその日まで、ちゃんと見ていて」

目の奥に火が点いた。顔がくしゃくしゃになってしまいそうで、おれはごまかすように笑った。

優しく頭を叩かれる。驚いて視線を上げると、琥珀色の双眸がくすぐったくなるほどやわらかく輝いていた。

「ああ、約束しよう。ラエル」

名前を呼ばれることが、こんなに嬉しいなんて知らなかった。

あまりにも嬉しくて、どうしようもなくなってしまって、おれは深く俯いた。

その拍子に、涙がひと粒転がり落ちる。冷えた頬を伝うその雫は、まるで太陽のかけらのようにあたたかかった。

光への祈り

稽古場は肌が湿るような熱気に満ちていた。

甲高い剣戟の音と気合いの声が飛び交う。汗を散らしてぶつかり合う討伐士たちの目には、稽古とは思えぬ猛々しい光がみなぎっていた。

ローアンは壁にもたれ、腕を組んでその様子を眺めていた。普段の陽気な笑みを拭い、厳つい顔には冴えたように静かな表情が浮かんでいる。

仲間たちの動きをひとりひとり確かめるように動いていた暗緑色の瞳が、ふと止まった。

ローアンの視線の先にいたのは、討伐士たちに埋もれてしまいそうなほど小柄な少年だった。しなやかな体の動きに合あわせて、項うなじで括った鋼色の髪が踊る。ところどころ軽い打撲やすり傷を負った肌は灰褐色。前髪の下から、金属めいた光沢を帯びた黒い角つのが覗いていた。

十代前半とおぼしき少年は、まだまだ幼さの抜けない面に焦燥を滲ませていた。投げ飛ばされて砂地に叩きつけられるたび、左右色違いの瞳に激しい苛立ちが宿る。跳ねるように起き上がると、再びまっすぐ相手に飛びかかっていく。

「おうおう、威勢がいいなあ」

ローアンは苦笑した。

少年は完全に冷静さを欠いていた。相手の力量を見極めもせず、感情に駆られるまま突っこんでいるだけだ。ローアンにしてみれば、戦っているとかえいいえない。

現に、少年の相手——カルヴァニールは本気のかけらも出していない。燃え立つような赤い毛並みは乱れることなく、立ち位置は稽古のはじまりからほとんど変わっていない。おそらく少年など、じやれかかってくる仔猫のようにしか感じていないだろう。

ローアンは少年に同情した。頭が煮えるような腹立たしさを、かつて自分も感じたからだ。そしてそのあとに押し寄せてくる、虚しい無力感も。

やがて――もう何度目か数えることも億劫になるほどの回数を迎えたとき、とうとう少年は起き上がれなくなった。仰向けに倒れたまま、荒い呼吸をくり返している。

ローアンは腕組みを解くと、組み合う討伐士たちの邪魔にならないよう、壁伝いに少年の許へ向かった。

「さぼりとはいいご身分だな、ローアン」

こちらに気づいたカルヴァニールが、いたずらっぽく目を細めた。ローアンは肩を竦める。

「見学って言ってくださいよ。これからやるところですって」

「どうだかな」

ローアンはしゃがみこむと、ぐったりと四肢を投げ出した少年の顔を覗きこんだ。軽く片手を上げてみせる。

「よっ。だいぶやられたみてえだな」

「……うるさい」

右は青、左は赤。思わずハツとするほど鮮やかな対比を見せる双眸を尖らせ、少年は睨み上げてきた。

ローアンは破顔した。

「上等上等。減らず口叩けるだけの元気があるなら、まあ大丈夫だな」

「放つといってくれ……。あー、ちつくしゅう」

少年は舌打ちすると、視線の矛先を泰然と佇む〈焰の使徒〉の長に向けた。

「あんた、めちゃくちゃ手え抜いてただろ」

「おぬしごときに出すような本気は、あいにく持ち合わせておらないでな」

カルヴァニールはさらりと言った。

「私の本気を出したければ、もう少しまともな姿勢でかかってこい。」

頭に血ののぼった瓜坊にかまっているなど、はっきり言って時間の無駄だ」

遠慮のない上司の言葉に、少年の頬が引きつる音が聞こえるようだ。ローアンは思わず目頭を押さえたくなった。

「ひとつ、忠告しよう」

カルヴァニールの声が、ほんの少しやわらかくなった。

「どんな状況においても、冷静さを忘れぬことだ。熱に吞まれ、無駄に力を削ぐのではなく、どのようにすれば早く確実に決着をつけられるのか。我が身を生かすことができるのか」

少年のまなざしから、剣呑さが溶けるように消える。残ったのは、与えられる教えを必死に理解しようとする真摯な光。

「おぬしは命を守るために戦うのだ。この国の民の、仲間の、おぬし自身の。そのためにはどんな方法が最善か、常に考えろ。がむしやらに立ち向かってどうにかなるほど、戦場は甘くはないぞ」

「……わかった」

少年は殊勝に頷いた。短気な面もあるが、基本的には素直な子どもだ。

カルヴァニールは口の端に微笑を刻んだ。

「わかればいい。次は期待しているぞ」

すべてが終わったのを見届け、ローアンは少年に手を差しのべた。

「ほら、いつまで寝っ転がってるつもりだ？」

「あ、うん」

少年は「いてて」と呟きながら起き上がった。埃まみれの衣を簡単に拭いてやる。

「ありがと、ローアン」

屈託のない笑顔で見上げてくる少年に、一瞬遠い面影が重なる。

ローアンはごまかすように鋼色の頭をわしゃわしゃと撫で回した。

「いいって。それより、さっさとジル姐さんところ行け。きつと心配しながら待ってるぞ」

「うわっ。もう、やめろよ！」

少年は慌てて飛びずさる。鳥の巣状態になった頭を抱えて、むすりとした表情を浮かべた。

ローアンが笑って更に手を伸ばしかけ、

「ラエル」

——カルヴァニールが、少年を呼んだ。

少年はきょとんとし、やがてその意味に気づき、嬉しそうに応える。

「なに？」

その表情に、ローアンはそっとため息をついた。

ああ、そうだ。

少年はもう、『ラエル』なのだ。

「手当てが終わったら私のところに来い。ココアをやろう」

「ホント！？　すぐ行く！」

ラエルはぱっと瞳を輝かせると、引き止める間もなく稽古場から飛び出していった。

弾むように駆けていく弟分の背中を見送り、ローアンはかりかりとこめかみを搔いた。

「……団長って、結構あいつに甘いっすよね」

「おぬしに言われたくはないがな」

自覚はあるらしく、否定は返ってこなかった。

「なんというか、遅くに生まれた末息子のようなものだな。手がかるからこそ、何かしてやらねばと思ってしまう」

「目に入れても痛くないって？」

「ああ、痛くないな」

親馬鹿である。

だが自分もいささか兄馬鹿気味なので、他人ひとのことは言えない。

「……それで？　何やら含むことがあるようだな」

「へっ？」

急に視線を向けられ、ローアンは声をひっくり返した。

カルヴァニールはにやりと笑った。

「『氣に入らない』と顔に書いてあるぞ」

「……いや、まあ」

——本当に、この男は鋭い。

背中に冷や汗を感じながら、ローアンはもう一度ため息をこぼした。

「団長……あいつに『ラエル』ってつけたんですね」

「ああ」

「……あいつには重すぎませんか？」

その意味は——『太陽』。

幾度沈もうとも、夜を越えて朝をもたらすもの。そのぬくもりで凍てついた氷雪を溶かし、あたたかな春を連れてくるもの。

復活と再生、光と希望の象徴。

どれほどのラシェンの民が焦がれ、望んでいるだろうか。その輝きを。

「あいつは、まだ子どもです。血のおいも、断末魔も知らない、まっさらな子どもです。それなのに、戦に縛りつけるような——そんなさだめを背負わせるような名は、却って酷じゃありませんか」

その名にこめられたのは、きっと途方もないような祈りだ。

愛しているからこそその重み。

だが、ラエルはそれに耐えきれののだろうか。潰れてしまうのではないだろうか。

かつて自分のたったひとつの希望だった、幼すぎたあの子のように。

——兄ちゃん

懐かしい、舌足らずな声が甦り、胸を刺した。

カルヴァニールは沈黙していたが、やがて静かに目を伏せた。

「信じたい……そう答えたら、卑怯か？」

錆びた金属を擦り合わせるような軋みの奥にある、懇願するような響き。

「大切なものを守るために強くなりたいと、そう言ったあの子を、

私は信じたい。信じて、みたいのだ」

偽らざる告白に、ローアンは微かに顔を俯けた。

「……………ずるくなんかいいすよ」

——はじめて会ったとき、なんてまぶしいのかと思った。

命の輝きに満ち溢れた、力強い瞳。決して生きることをあきらめないまなざし。

この子なら、と。

この子なら大丈夫かもしれないと、思わずにはいられなかった。

「たぶん、俺もおんなじです」

ローアンは長い息を吐くと、片手で顔を覆った。

「すいません、八つ当たりでした。忘れてください」

「いや…………」

カルヴァニールはゆるりと首を振った。

「私も悪かったのだ。おぬしも気に病むな」

いったん言葉を途切らせ、彼は微かに笑んだ。

「おぬしも、あの子に名をつけたかったのだろうか？」

ローアンは顔を上げ、表情を歪めた。

「……団長って、実は心が読めたりします？」

「ただの年の功だ」

カルヴァニールの笑う声は優しく、この男にとって自分もまた『息子』なのだ実感した。

それはひどく心地いい、泣きたくなるようなあたたかさだった。

「いいんです」

確かに、大切な弟分の名づけ親になれば、と考えていた。

だがその裏にあるのは、浅ましい——身代わりを求める思い。

カルヴァニールの祈りの足元にも及ばぬ、愚かで醜い望みだ。

「団長がつけてくれて、よかったんです。何より……あいつは、喜んでるでしょう」

たとえ自分が名づけたところで、あんな笑顔を見ることはできなかった。

「だから、……いいんです」

力なくくり返すと、軽く肩を叩かれた。わずかに低い位置にある蜂蜜色の目が、微笑む。

「そうか」

何も訊かずにすべてを受け入れ、包みこんでくれる空気に甘えるように、ローアンは瞳を閉じた。

――ラエル。

光り輝くもの、絶望のなかから甦る希望よ。

どうかおまえが暗い鎖に縛られぬように。果てなき人の望みに押し潰されぬように。

おまえが我らを照らすように、おまえも光のなかにあるように。

闇を裂き、朝へと生まれいずる太陽であれ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1791h/>

焰の使徒

2011年4月30日11時46分発行